様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年 ５ 月２２日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2007～2008
課題番号：19790834
研究課題名（和文） 一次二次救急施設における自殺企図者と非自殺企図者(自傷・自殺念慮患者)の比較研究

研究課題名（英文） A comparative study of suicide attempt and non-suicide attempt (self-harm and suicidal ideation) of primary and secondary emergency care unit

研究代表者
丸田 真樹 (MARUTA MASAKI)
岩手医科大学・医学部・研究員
研究者番号：70438472

研究成果の概要：
自傷、希死念慮、自殺企図に共通して言えるのは、相談先の整備、リスクのアセスメントと対処が必要であることなどである。希死念慮に関しては、精神科診療において希死念慮の同定とそれへの対処が要求される。自殺企図を防止する方策としては、精神科医ばかりでなくプライマリケア医や周囲のサポートが不可欠である。特に、全般的重症度とストレス値の把握は自殺企図のリスクの評価に有用であり、両者とも精神科臨床やプライマリケアの現場で積極的に取り入れていくべきと考えられる。また、精神科の早期受診や相談先などの環境整備が自殺防止に寄与するものと考えられた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2007 年度	1,300,000	0	1,300,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総 計	2,300,000	300,000	2,600,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：内科系臨床医学・精神神経科学
キーワード：社会精神医学、精神科救急、医療福祉、臨床、自殺企図、自傷、救急、希死念慮

１．研究開始当初の背景

周知のように、わが国の自殺者数は 1998 年に前年と比べ急増(前年比増加 34.7%)し、3 万人を突破した。自殺者数はその後も増え続け、平成 15 年度には年間 3 万 5 千人に達している。1998 年の自殺急増の際、増加は全年齢層に及んでいるが、特に 50 歳代の自殺が前年比で 45.7%の増加と高い値を示した。このような状況を改善するための効果的な自殺予防対策が急務である。そのためには、自殺企図者並びに自殺関連行動である自傷行為や希死念慮をもつ患者背景の調査研究が不可欠であると考えた。

２．研究の目的

本研究では、自殺企図者の現状、背景を考察すると共に、自傷行為や希死念慮を認める自殺関連行動患者の現状や背景を明らかにするために、下記（1）を主たる目的として行った。特に、より詳細な自殺関連行動の実態を明らかにするために、救急センター症例も含めて集積した。また、年代による自殺企図の実態を明らかにするために、下記（2）を副次的研究として行った。

(1)精神科救急外来(1 次 2 次外来及び岩手県高度救命救急センター）における希死念慮・自傷・自殺企図：各症例群間の比較検討

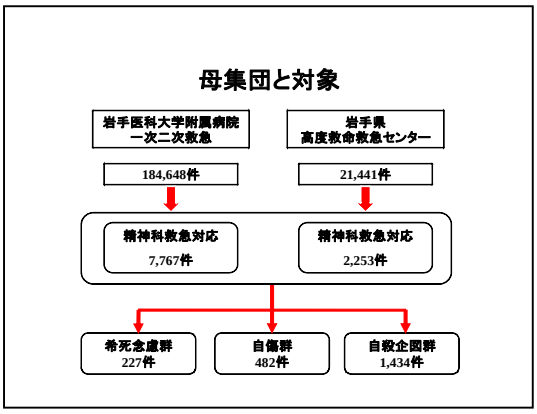
(2)岩手医科大学附属病院精神科 1 次 2 次外来を受診した自殺企図者の年代による検討（39 歳以下の若年群と 40 歳以上の中高年群の比較検討）

３．研究の方法

(1)調査期間：平成 14 年 1 月 1 日～平成 21 年 3 月 31 日

(2)調査施設：岩手医科大学附属病院 1 次 2 次外来及び岩手県高度救命救急センター

(3)対象：調査期間に集積された症例のうち、以下を解析対象とした：①希死念慮を呈しているが自殺企図に至っていないケース(以下、希死念慮群)227 件、②希死念慮がなく自傷行為（過量服薬を含む）後に受診しているケース（以下、自傷群）482 件、③岸らの自殺・自殺企図の診断基準を満たしているケース（以下、自殺企図群）1,436 件。



(4)評価者：救急担当精神科医 7 名と上級精神科医 1 名

(5)評価項目：対象者に関して、当科の「救急外来患者受付情報用紙（ケースカード)」の項目（性別、年齢、教育年数等)、ICD-10 診断、自殺企図前の相談の有無、生涯うつ状態経験回数、過去の自殺関連行動の既往、総合評価尺度（Global Assessment of Scale：GAS)、ホームズ社会的再適応評価尺度(Holmes social readjustment rating scale)の生活変化単位(LCU: life change units)、等を調査した。

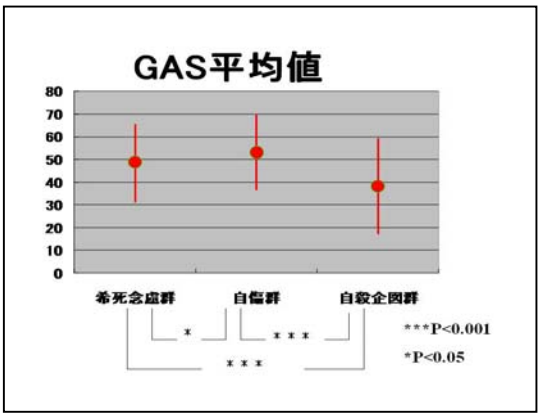
(6)統計解析：平均値の比較には T 検定を用い、率の比較には Fisher の直接確率検定を用いた。有意水準は 5%とした。3 群間平均値の検定には一元配置分散分析、その後の 2 群間の検定には Bonferroni 検定を用いた。また、比率の検定は χ^2 検定を用いた。

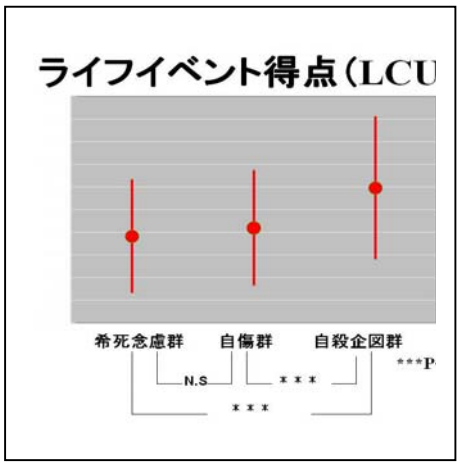
４．研究成果

（1）希死念慮・自傷・自殺企図：各症例群間の比較検討：各群とも女性の件数が多く、年齢は自殺企図群が有意に高く、教育年数は希死念慮群が他群に比し高値であった。GAS score は自傷群が高値であり、LCU score は自殺企図群が高値であった。相談先の有無については自傷群の約 7 割、自殺企図群の約 6 割が相談先が無い状態で受診となっていた。自傷と自殺企図の手段では、自傷群の約 4 割、自殺企図群の約 5 割で薬物が用いられていたが、自傷群では刃器や刺器による割合が最も高く（43%)、自殺企図群では毒物（7%)、ガス（4%)、飛び降り（4%）なども認められた。精神科診断では F3 と F4 の合計が各群とも 6 割以上を占めていた。自殺関連行動の既往では、希死念慮群と自傷群で 6 割以上がその存在を認めていた。医療機関の受診歴に関しては、希死念慮群で、約 8 割が精神科通院歴を有するのに対して、自殺企図群では約 5 割であった。

	希死念慮	自　傷	自殺企図
性別	女性	女性	女性
年齢	32 歳	30 歳	37 歳
自殺関連行動の既往	約 7 割に既往あり	約 7 割に既往あり	約 55%に既往あり
教育年数	12.3 年	11.7 年	11.6 年
診断	F3	F4	F3≒F4

原因・動機	対人関係、家庭問題	対人関係、家庭問題	複合
相談先	6割有	7割なし	6割なし
3回以上うつ経験	30%	45%	35%
転帰	帰宅	帰宅	入院





ICD 診断分類（%, P<0.001）

	希死念慮群	自傷群	自殺企図群
F0	3.5	5	2.5
F1	3.1	1.3	3.4
F2	16.7	9.2	12.6
F3	34.8	20.8	31.3
F4	25.6	41.3	32.9
F6	7.5	10.3	10
不明	8.8	12.2	7.3

(2) 希死念慮・自傷・自殺企図：各症例群間の比較検討：考察

①中高年群では、初回の自殺企図時に重篤なうつ病症状を呈していることが多いと推察される。

②有職者の割合が少ないこと、企図理由に経済苦を挙げている割合が高いことから昨今の不安定な経済状況が中高年の自殺企図の一因になっていると考えられる。

③精神科通院歴を有するものの割合が約 60%であることから、入院加療の敷居を下げることも中高年の自殺率低下に寄与するものと思われた。

④自傷、希死念慮、自殺企図に共通して言えるのは、相談先の整備が急務であること、F3 と F4 の症例に対して重点的にリスクのアセスメントと対処が必要であること、これと関連して相対的に過量服薬時のリスクが高い三環系抗うつ薬の処方を極力控えるべきであることなどである。希死念慮に関しては、精神科診療において希死念慮の同定とそれへの対処が要求される。自殺企図を防止する方策としては、精神科医ばかりでなくプライマリケア医や周囲のサポートが不可欠である。また、GAS と LCU score は自殺企図のリスクの評価に有用であり、両者とも精神科臨床やプライマリケアの現場で積極的に取り入れていくべきと考えられた。

(3) 岩手医科大学附属病院精神科 1 次 2 次外来を受診した自殺企図者 363 件の年代による検討（39 歳以下の若年群と 40 歳以上の中高年群の比較検討）：結果の要約

①両群とも女性の割合が有意に高かった。

②中高年群では自殺企図歴を有さない割合が高い。

③中高年群の教育年数は有意に少ない。

④中高年群では有職者の割合が有意に少なかった。

⑤中高年群はよりストレス値の高いライフイベントで自殺企図に至っている。理由としては家族関係や経済苦、病苦を挙げるものが多い。

⑥両群とも企図手段として大量服薬をとるものが多い。

⑦ICD-10 診断では、F3 の割合が高く、GAS は、中高年で低値であった。

⑧当日転帰では、両群とも帰宅の割合が高かったが、中高年群で精神科入院の割合が高かった。

(4) 岩手医科大学附属病院精神科 1 次 2 次外

来を受診した自殺企図者の年代による検討（39 歳以下の若年群と 40 歳以上の中高年群の比較検討）：考察

①自殺企図 363 件の背景因子の検討からは、39 歳以下群では女性、40 歳以上群では男性の割合が高く、後者では経済苦や病苦を理由として自殺企図に至る割合が高かった。

② 企図手段では、39 歳以下群では致死性の低い処方薬の大量服薬をとる場合が多く、40 歳以上群では比較的致死性の高い自殺企図手段が多かった。

③ 自殺企図前の相談先としては、39 歳以下群では友人や知人、40 歳以上群では身体科医師が多かった。

④ 精神科受診の既往に関しては、39 歳以下群では精神科通院中である割合が高く、複数回自殺企図を繰り返していることが多いのに対して、40 歳以上群では自殺企図により初めて精神科受診となる場合が多かった。

⑤ 症候学的には、39 歳以下群では、社会的に引きこもりを認め、しばしば精神病症状や誇大性を呈しているのに対して、40 歳以上群では「精神病症状を伴ううつ病」を呈し、その結果自殺企図に至っていると考えられる。GAS やBPRS 合計点から考えると、中高年者では比較的重症度の高い精神症状を呈して、自殺企図に至っていることが推定される。

⑥ 診断としては、39 歳以下群では神経症性・ストレス関連障害（F4）、40 歳以上群では気分障害が多かった。40 歳以上群は企図手段が重篤であり、救急医療や一般身体医療を受療することが想定され、プライマリケアにおけるうつ病に対する取り組みが必須の課題であると考えられた。

⑦ ライフイベントと精神医学的経過：39 歳以下群では比較的ストレス値の低いライフイベントで自殺企図に至っていることが多いことから、青年群では、強い不安や動揺しやすい心性、死に対する恐れと現実からの逃避が介在していると考えられた。40 歳以上の群では、比較的ストレス値が高いライフイベントが初発・2 回目のうつ状態の発症に関連していると考えられる。症状では重篤なうつ病の中核症状を呈し、罪業感と制止傾向という中高年のうつの特徴を反映して身体科に通院している割合が高い。つまり、この群はわが国の中高年の自殺者の状況を映し出していると考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 2 件）

①丸田真樹，精神科救急における希死念慮・自傷・自殺企図：各症例群間の比較検討，第 16 回日本精神科救急学会総会，2008 年 10 月 15 日，国立京都国際会館（京都府）

②丸田真樹，岩手医科大学附属病院精神科 1 次 2 次外来を受診した自殺企図患者の年代による検討，第 32 回日本自殺予防学会総会，2008 年 4 月 19 日，いわて県民情報交流センターアイーナ（盛岡市）

６．研究組織

(1)研究代表者

丸田　真樹（MARUTA MASAKI）
岩手医科大学・医学部・研究員
研究者番号：70438472

(2)研究分担者

(3)連携研究者